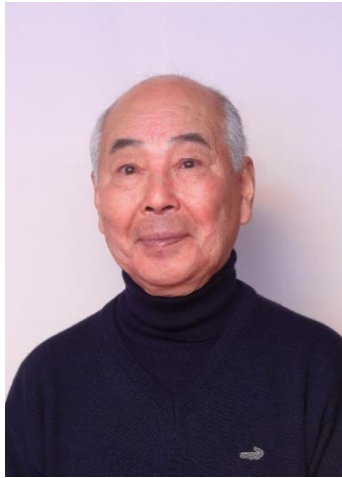


## 令和3年度 名古屋市芸術賞受賞者の概要

【 芸術特賞受賞者 <sup>よしおか</sup>吉岡 <sup>ひろあき</sup>弘昭（79歳） 美術 】



名古屋市出身。昭和 36（1961）年に愛知県立瑞陵高等学校普通科（定時制）を卒業し、画家になることを決意。油彩画にて昭和 38（1963）年から 4 年連続で二科展に、また昭和 41（1966）年には毎日現代日本美術展に入選。昭和 42（1967）年に東京のスルガ台画廊にて油彩画の個展を開くなど、作家生活を開始。昭和 44（1969）年には銅板に直接描画するドライポイント技法による銅版画の制作を始める。その後現在に至るまで、銅版画と油彩アクリルによるペインティングの制作を往還しながら、それぞれの個展を交互に開催している。

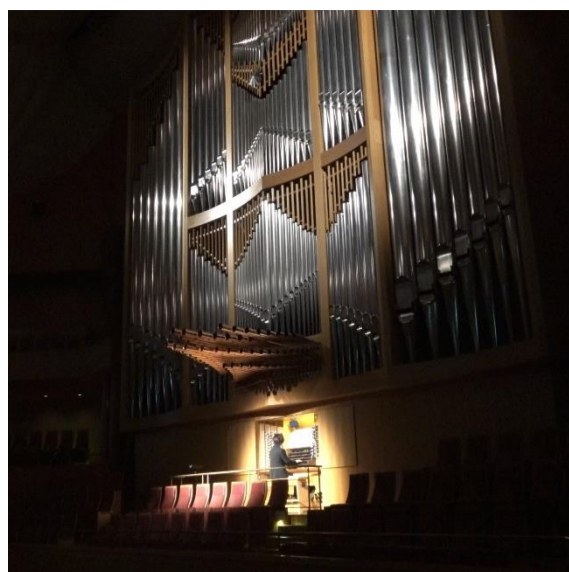
吉岡氏の作品は現代社会やそこに生きる人間を独自の視点で表現しており、ユーモアやペーソスあふれる世界観が特徴である。数多くの作品が愛知県美術館や町田市国際版画美術館、エジプト現代美術館など国内外の美術館に収蔵されている。また、「リュヴリアナ国際版画ビエンナーレ展」（平成元年）や「ソウル国際版画ビエンナーレ展」（平成 2 年）等に招待出品するなど、国際的にも高く評価されている。令和 3（2021）年には「吉岡弘昭展『不思議なヒトとイキモノ達』」を開催しており、今なお旺盛な制作活動を続けている。

また、愛知県内にある 6 つの幼稚園・保育園・小学校で建物外壁にモザイクタイル等による大きな壁画を制作するなど地域社会にも貢献している。さらに、創形美術学校（東京）、金沢美術工芸大学（石川）、名古屋芸術大学（愛知）などで教鞭をとり、後進の育成にも尽力してきた。

こうした長年にわたる芸術創造活動と後進の育成は当地域の文化芸術の振興に大きな役割を果たしており、その功績は多大である。

## 令和3年度 名古屋市芸術賞受賞者の概要

【 芸術奨励賞受賞者 <sup>よしだ</sup>吉田 <sup>あや</sup>文（50歳） 音楽（パイプオルガン） 】



名古屋市出身。中学校を卒業後、単身渡独。パイプオルガンの研鑽に励み、平成6（1994）年にはA級教会音楽家のドイツ国家資格を取得するなど19年間にわたり海外で教会音楽家・コンサートオルガニストとして活動を行う。国内においては、平成4（1992）年に愛知県芸術劇場コンサートホールのオルガンデモンストレーションに協力。以降、全国各地でコンサートを開催している。名古屋での活動としては、カトリック五反城教会を拠点に当地域のパイプオルガン文化を築いた「名古屋オルガン友の会」の精神を受け継ぎ、「名古屋オルガンの秋実行委員会」を平成19（2007）年に設立。市民の方々に向けた入場無料のコンサートを定期的に企画している。さらに平成23（2011）年以降は、愛知県芸術劇場コンサートホールにて、平日の午前中に親しみやすい作品を廉価で提供する「パイプオルガンブランチコンサート」を企画・開催し、パイプオルガン愛好者の拡大に努めている。

こうした多彩な演奏活動を可能にする技巧的・芸術的な演奏と巧みなプログラム構成は専門誌、新聞等で高い評価を得ている。また、共演者・伴奏者としても活発に活動を行い、多々のオーケストラ、合唱団、ソリスト等のパートナーとして定評を得るほか、現代舞踊など異分野とのコラボレーションや様々な芸術分野を包括する総合的舞台芸術の創作にも意欲的である。今までに培った知識と経験を活かし、祈りの楽器であるパイプオルガンを通じて、人々の心を豊かにするような音楽を伝えることを目指しており、今後もさらなる活躍が期待される。

## 令和3年度 名古屋市芸術賞受賞者の概要

【 芸術奨励賞受賞者 <sup>かにえ</sup>蟹江 <sup>びはち</sup>尾八（68歳） 伝統芸能（民謡） 】



名古屋市出身。全国の民謡に精通しており、その中でも特に座敷民謡と端唄を得意としている。昭和48（1973）年、民謡と端唄（唄及び三味線）を篠田紫栄氏に師事し、昭和62（1987）年に「名古屋甚句」で「全日本民謡民舞連盟全国大会」優勝、平成2（1990）年には「岡崎五万石」で「輝け！日本民謡大賞愛知県大会」優勝を飾る。

平成4（1992）年以降は毎年「民謡と端唄 蟹江尾八会」の公演を行い、令和3年度の公演にて30回を数える。また、弾き語りライブコンサートを各所で開催するほか地元の盆踊り曲や新作端唄の作詞作曲を手掛けるなど意欲的に活動を行っている。

こうした活動の一方で平成9（1997）年より千藤幸蔵氏の下で邦楽学理を修得し、名古屋市及びその近郊地域における埋もれた民謡の発掘採譜の研究に取り組む。平成28（2016年）には、こうした研究の成果として、発掘採譜した民謡に三味線伴奏の手付けをし、解説を加えた『愛知県民謡集 第一巻 一三味線譜と解説一』を発刊。本書は、民謡の数が少ないと言われてきた当地域に、消え去ろうとしていた文化を蘇らせ、民謡文化の発展の一翼を担うことを願って制作されたものであり、現在は第二巻の制作に取り組んでいる。第二巻は近々の発刊が予定されており、今後も演奏活動と研究活動の両方において、さらなる活躍が期待される。



## 令和3年度 名古屋市芸術賞受賞者の概要

【 芸術奨励賞受賞 ちゅうぶたんかかい 中部短歌会（創立99年） 文芸（短歌） 】



大正12（1923）年に前身となる「名古屋短歌会」の名称で歌誌『短歌』を創刊。昭和16（1941）年に名称を現在の「中部短歌会」に改める。歌誌『短歌』は戦時中に一時発行を中断した時期があったものの、創刊から現在に至るまでほぼ毎月刊行しており、平成29（2017）年には通巻1,100号に到達した。

昭和30（1955）年以降は春日井瀆氏が、昭和54（1979）年以降は春日井瀆氏の逝去に伴い春日井建氏が主幹を務めた。春日井瀆氏と建氏の両氏の活躍のほか、稲葉京子氏など全国から多くの才能を発掘したことにより、両氏が主幹を務めた時代に歌誌『短歌』は全国的な知名度を得た。平成16（2004）年に春日井建氏が逝去されたことに伴い、以降現在に至るまで、大塚寅彦氏が代表を務めている。

中部短歌会は中部圏を中心としつつ関東地方や中国地方にも支部があり、毎月の本部歌会のほか各支部でも歌会が行われている。また、各地域の文化的イベントへの参加も積極的に行っており、こうした活動を通して多くの人々に短歌に親しむ機会を提供している。さらに、年に一度全国大会を開催し、外部の著名歌人などをゲストに迎えトークや講演等を行うことで外部の空気を取り入れ、充実した活動を展開している。現在は約450名の会員が活動を行っており、古参の会員を始め、地域文化としての短歌を支えるなど、短歌界の発展に寄与してきた。

令和4（2022）年には創立100周年を迎えるため、記念号の刊行や記念全国大会の開催、10年ごとに刊行している合同歌集の制作やその他記念事業が多数企画されており、今後もさらなる活躍が期待される。